厚生労働科学研究費補助金・こころの健康科学研究事業

日中の過眠の実態とその対策に関する研究

平成17年度研究報告書

平成18年３月

主任研究者　大川　匡子

目　　次

Ⅰ．平成17年度　総括研究報告書

日中の過眠の実態とその対策に関する研究…… 1

滋賀医科大学医学部　大川　匡子

Ⅱ．平成17年度　分担研究報告書

1）一般住民の日中過眠と心の健康調査

日本人一般住民における寝酒と睡眠薬の使用に関する疫学研究…… 20

日本大学医学部　大井田　隆、兼板　佳孝、内山　真

2）総合病院に勤務する交代制看護職員の日中の眠気について…… 35

秋田大学医学部　本橋　豊

3）看護師の睡眠、健康度と医療ミス …… 41

滋賀医科大学医学部　大川　匡子、今井　眞、有村　真弓、堀江　昌美
向井　淳子、安藤　光子

4）教育現場での過眠と心の健康調査 …… 52

国立精神・神経センター精神保健研究所　内山　真

5）ジアゼパム服用後の主観眠気評価と

客観的精神運動機能に関する研究…… 57

秋田大学医学部　三島　和夫

6）高校生の睡眠の現状と午睡導入の試み…… 64

久留米大学医学部　内村　直尚

7）交通機関ドライバー検診における閉塞性睡眠時無呼吸症候群

スクリーニングにおける問題点について…… 67

神経研究所附属睡眠学センター　井上　雄一、對木　悟、岡　靖哲

8）トラック運転手の睡眠障害調査 …… 78

滋賀医科大学医学部　宮崎総一郎、李　嵐、田中　俊彦

Ⅲ．平成17年度研究報告会プログラム…… 84

日中の過眠の実態とその対策に関する研究

主任研究者：大川　匡子　滋賀医科大学精神医学講座教授

研究要旨：日中の過眠に対する社会的関心は高まっている。それは日中の過眠を呈する疾患のため経済的損失が大きいことや事故などを引き起こす可能性が大きいことによる。しかしその実態は不明なままである。すなわち過眠については自覚的眠気、注意力低下、覚醒度の低下などさまざまな症状として表現されているがその生理的、生物学的背景について科学的に解明されていない。そのため過眠のスクリーニングや評価、その対策に関しては現在も不十分なままであり、今後も、日中の過眠による事故やうつ病を含めた心の健康の障害に伴う社会的損失は増大すると考えられる。これまで睡眠障害に関する研究は行われてきたが、過眠と睡眠障害は必ずしも一致せず、日中の過眠と心の健康の関連性も不明である。従って、夜間の睡眠ではなく日中の過眠の観点から研究を進める必要が急務となっている。本研究では初年度にひきつづき１．過眠に対する簡便な評価法を作成する。それを用いて、日中の過眠の疫学的研究及び心の健康との関連についての調査を、一般地域住民、学校生徒、看護師、について実施した。また２．睡眠時無呼吸症と日中の過眠との関連性を科学的な視点から明らかにする目的で患者について客観的、主観的眠気と睡眠状態を合わせて観察した。また３．健康成人、高齢者について眠気の生理、心理的観察を行った。

研究組織

主任研究者

大川　匡子　滋賀医科大学精神医学講座

分担研究者

内山　　真　日本大学医学部精神医学講座

大井田　隆　日本大学医学部公衆衛生学教室

本橋　　豊　秋田大学社会環境医学講座

内村　直尚　久留米大学精神神経医学講座

井上　雄一　神経研究所付属睡眠学センター

三島　和夫　秋田大学精神医学講座

宮崎総一郎　滋賀医科大学睡眠学講座教授

Ａ．研究目的

近年、日中の過眠が社会的な関心を集めている。日中の過眠は、運転手では交通事故の危険を増大させるため、その結果生じる社会的損失は甚大である。一般労働者にとっては、労働災害の危険が増大するばかりでなく、作業効率の低下を招くため企業にとっての損失は大きい。児童や生徒においては、学習障害を引き起こす。また、日中過眠によって生じるうつ病などの心の健康への影響も多大であ

ると考えられる。しかし、これまで睡眠障害に関する研究がほとんどであり、日中過眠の疫学的データはない。また、不眠が必ずしも日中過眠を引き起こすわけではなく、睡眠障害の把握だけでは日中の過眠の把握は困難である。更に、現在過眠の程度を正確に且つ簡便に評価する方法も確立されていない。従って本研究は、一般地域住民、高齢者、企業労働者、公務員、教育現場、運転手など様々な対象における過眠の実態を調査し、過眠がこれらの人々の心の健康にどのような影響を与えているのかを明らかにする。また、過眠を正確に且つ簡便に評価する方法を作成することを目的とする。

研究計画

第２年度の目的

１．過眠に対する既製の質問紙（評価尺度）を用い、その信頼性、妥当性の検討を行う。各研究分担者は過眠についての質問紙といくつかの既製睡眠質問紙を用い特定の集団について調査を試行する。

２．過眠の原因として最も頻度が高いと考えられる睡眠時無呼吸症候群の患者に対して、過眠の評価尺度を試行し、客観的重症度との関連を調べ、評価尺度の妥当性を検討する。

３．健常者について主観的、客観的眠気、精神運動機能を評価するための生理的指標とその有用性について検証する。

Ｂ．研究方法

１．中、高校生集団、および看護師集団について昼間の眠気について Epworth Sleepiness Scale (ESS)、夜間の睡眠について Pittsburgh Sleep Quality Index (PSQI)、心身の健康度についてはGeneral Health Questionnaire 28または15を用いる。これらの共通質問紙と共に看護師・医療従事者については生活・勤務状況・医療ミスに関する項目、学校生徒については生活状況、身体状況についての質問を設定した。

２．昼間の眠気が強いとされる集団、睡眠時無呼吸症の患者について終夜ポリソムノグラフィー、簡易型無呼吸計測装置を用いて睡眠中の無呼吸状況を客観的に評価する。昼間の眠気についてEESを用いると共に、気分状態について気分プロフィール検査（Profile of Mood States : POMS）や生活の質（Quality of life : QOL）の調査も試行した。さらにCPAP治療によるこれらの状況の変化を比較した。

３．健常者（若年者、高齢者）の眠気についてベンゾジアゼピン系睡眠薬を投与し、その前後で１）主観的眠気指標：Stanford Sleepiness Scale (SSS), Visual Analog Scale (VAS)　２）精神運動指標：Digit Symbol Substitution Test (DSST), Choice Reaction Time (CRT)

（論理面への配慮）

本研究班の疫学調査研究は「疫学研究に関する倫理指針」（平成14年６月17日文部科学省・厚生労働省告示第２号）及び「疫学研究に関する倫理指針の施行について」（平成14年６月17日付け文部科学省研究振興局長・厚生労働省大臣官房厚生科学課長連名通知）に基づいて実施した。

大川は、看護師の睡眠調査にあたり１．本調査は無記名で行い、調査への協力は対象者

の自由意志によることを書面で明記したうえで同意を得た。２．研究の実施については滋賀医科大学倫理審査委員会の承認を得た。

内村らは、対象の高校生についてアンケート調査および午睡の導入についてはその趣旨を十分に説明し、学校の責任者および生徒に同意を得た上で実施した。

井上らは、本研究のプロトコールは神経研究論理委員会の審査を受け採択され、後に関連施設の了解を得た。また、調査への協力は自由意志によりかつ無記名で行うこととし、対象者に対して研究目的を十分に説明し、文書による同意を得た後に研究を開始した。

内山らは、対象となったすべての高校生に対し、研究の目的、個人情報の取り扱い、参加したくない場合には参加しなくてよいこと、参加しないことにより不利益を被ることがないことについて説明を行い同意が得られた場合に調査票記入を依頼した。調査及び集計は各高校の保健教諭が行い、主任研究者に個人を特定できる情報が渡らないよう配慮した。

その他の分担研究のうち患者を対象とした場合には患者にその研究の目的、必要性を説明し同意の得られたものについて実施した。またすべての研究課題はそれぞれの所属倫理委員会の承認を得た。

Ｃ．研究結果

課題１．過眠に対する簡便な評価法を作成し、これを用いて日中の過眠の疫学的研究及び心の健康との関連について調査を行う。（初年度および第２年度研究目標）

大川は、大学病院看護師を対象に自己記入式質問紙を用いて睡眠、精神的健康度を調査し、インシデント、アクシデントとの関連について評価した。さらに第２年度には一般総合病院の看護師を加え調査を実施した。その結果対象集団の睡眠時間が短く、精神的健康度が低いことが判明し、ミス発生に寄与する要因として三交代勤務、眠気が強い、精神的健康度が低いことが挙げられた。

内山は、高校生の日中の眠気と睡眠習慣・心身の問題についてピッツバーク睡眠質問票、一般健康調査（GHQ）などをもちい、千葉県においてコミュニティー研究を行った。大都市近郊の高校生においては平日の睡眠時間が短く、慢性的な睡眠不足状態にあり、日中の過剰な眠気を引き起こしていることがわかった。学校外で勉強しないことが日中の過剰な眠気と関連していたことより、高校生の短い睡眠時間は受験勉強のためではなく、他の要因によることがわかった。

大井田は、本研究は2000年の６月に厚生労働省が実施した平成12年保健福祉動向調査のデータを用いた。本調査は日本中から無作為に抽出した300地区の12歳以上の全住民を対象にして自記式調査票を配布し、対象者が記入したものを回収した。このうち、20歳未満と不完全なデータを除いて寝酒については18,205人、睡眠薬使用については16,804人の回答を解析した。

その結果１週間に１回以上寝酒を行うものは男性で48.3%（95%CI：47.3%－49.3%）、女性で18.3%（95%CI：17.5%－19.1%）であり、男性で有意に高い割合であった。１週間に１回以上睡眠薬を使用するものは男性で4.3%（95%CI：3.8%－4.8%）、女性で5.9%（95%CI：5.4%－6.4%）であり、女性で有意に高い割合であった。寝酒を行うものの割

合は加齢とともに徐々に増えたが、老年期には徐々に減少した。睡眠薬を使用するものの割合は老年期には徐々に増加した。多変量解析で、寝酒と男女共通して有意な関連性が認められたのは、「夜間覚醒」と「抑うつ状態」であった。睡眠薬の使用と男女ともに有意な関連性が認められたのは「年齢」、「入眠障害」、「早朝覚醒」、「抑うつ状態」、「睡眠時間」、「自覚的睡眠充足度」であり、このうち「入眠障害」が最も高いオッズ比を示した。

このことから日本人では睡眠薬の使用より寝酒のほうが一般的であるが、老年期では睡眠薬の使用が目立って増加する。また、寝酒と睡眠薬の使用では関連する要因が異なる。これらの結果を踏まえて、今後の睡眠衛生に関する公衆衛生活動を推進していくことが重要である。

本橋らは、交代制勤務に従事する看護職員の日中の眠気を質問紙調査により評価した。研究対象は、秋田市内の２つの総合病院に勤務する看護師626名（女性603名、男性23名）。平均年齢は35.7±10.5歳）であった。調査内容は、性、年齢、勤務年数、交代制勤務形態などの基本属性の他、月経状態、自覚症状、睡眠の質に関する質問、Epworthの日中過眠尺度（ESS）、医療事故の有無などに関する質問であった。Epworthの平均得点は7.99±3.72点であり、中等度過眠群および重度過眠群は対象者全体の11.9%であった。多重ロジスティック解析の結果、「落ち着かない」「ゆううつだ」「仕事中、強い眠気に襲われる」「以前とくらべて疲れやすい」といった要因がESSの高得点と関連していることが明らかにされた。これらはいずれも慢性蓄積疲労に関連した要因と考えられ、勤務に伴う慢性蓄積疲労状態が日中の眠気を誘発している可能性が考えられた。

内村は、睡眠時無呼吸症候群（SAS）患者における気分状態や生活の質の障害を明らかにするために、久留米大学病院睡眠医療外来を受診したSAS患者31名に対し、治療前と治療３ヶ月後に気分プロフィール検査およびWHO/QOL-26の質問紙検査を施行し健常者と統計学的に比較した。またSAS患者では重症度の指標である無呼吸低呼吸指数および日中の眠気の主観的評価尺度であるエプワース眠気尺度と気分状態、QOLとの相関について検討した。SAS患者では健常者に比べ、不安－緊張、抑うつ－落ち込み、怒り－敵意、疲労、混乱が大きく、QOLも有意に低下していた。SAS患者での日中の眠気がQOL低下に関与している可能性が示唆された。CPAP療法により多くの領域の気分状態とQOLが有意に改善した。

課題２．眠気の強い集団、睡眠時無呼吸症患者の眠気とその客観的評価

井上は、本研究では以上の問題点を考慮して、大規模睡眠検診の予備段階として、まず簡易型無呼吸計測装置を用いた在宅での睡眠時無呼吸のスクリーニングの妥当性を検討すると共に、携帯型行動量測定器を併用することがそのスクリーニング精度を向上させるか否かについて検討した。この結果無呼吸計測装置と行動量測定器の２つの機器を用いることにより睡眠時呼吸障害スクリーニングが可能であり無呼吸指数15以上の要治療群を検出することが可能であることを明らかにした。

宮崎は、トラック運転手における睡眠障害の実態を明らかにするとともに、睡眠時無呼吸症候群のスクリーニング調査である。調査対象は滋賀県内で運輸活動する事業所589箇

所、合計12,193人。本年度の調査対象は、21事業所の363人である。調査は２段階式で行った。第１段階は、自己記入式質問紙調査、第２段階は、２次調査質問紙＋終夜Sp02測定を実施した。睡眠障害について、不眠は47.1%、過眠は22.9%、RLSの疑いは34.4%であった。なんらかの睡眠問題を持つ人は全体の47.1%にみられた。不眠の頻度は31.4%であった。入眠困難は12.1%、中途覚醒は13.8%、熟眠感欠如は21.8%であった。習慣性いびきは27%で、睡眠時に観察された呼吸停止（無呼吸）は8.3%であった。

本調査でトラック運転手における睡眠障害をある程度把握した。これから２年間かけてより詳細な睡眠障害の実態調査をする予定である。

課題３．健常者の眠気評価について

三島は、健常若年被験者８名(平均19.8歳)、健常高齢被験者７名（平均60.9歳）を対象として、ジアゼパム（DZP）単回投与後の血中濃度、精神運動機能、自覚的眠気について検討した。その結果、若年者及び高齢者群間でジアゼパムの薬動態に有意な加齢変化は認めなかった。若年者群において、DZP10mg投与後に有意な精神運動機能の低下と自覚的眠気の増大が認められたが、DZP５mg投与後のこれらの変化は有意ではなかった。高齢者群においては、DZP５mg投与後に有意な精神運動機能の低下が認められ、これは若年者群DZP10mg投与後とほぼ同等の変化であった。一方、高齢者群DZP５mg投与後の自覚的眠気の増大は有意な変化ではなく、若年者群DZP５mg投与後とほぼ同等であった。以上のことから、高齢者群ではDZP5mg投与後に若年者群DZP10mg投与後と同程度の精神運動機能の低下を生じるにもかかわらず、自覚的眠気をより軽く評価する傾向が明らかとなった。すなわち、高齢者では若年者に比較して、ジアゼパム投与後の精神運動機能の低下が大きいにもかかわらず、自覚的眠気をより軽く評価する傾向が明らかとなり、客観的な精神運動機能の低下と自覚的眠気の増大との間に乖離が認められた。このことが、ジアゼパム服用後のヒューマンエラーの危険性を高める一因であると推測された。

Ｄ．考　　察

１．大川らの看護師集団調査で睡眠時間は一般住民に比して少なかった。睡眠時間が６時間未満の看護師が25%存在し、これらは脳・心疾患の高リスク群（2001年厚生労動省：脳・心臓疾患の認定基準に関する専門検討会報告書）として注意が必要である。また自覚的な眠気を示すESSは某大学病院看護師330名の平均である7.3点よりは低かった。

ミス発生の要因は仕事量が多い、三交代の深夜勤務が多い、眠気が強い、精神的健康度が低いことが挙げられた。仕事量に関する項目は多変量解析で有意な変数として残らなかった。また精神的健康度を評価するGHQの４つの下位項目を検討すると身体、不眠不安、社会活動、うつのうちで社会活動の項目のみがミスを起こした群において高かった。

通常の睡眠覚醒リズムを持つ場合は覚醒度が最も低下するのは深夜から早朝であることから、この深夜勤務時間帯における覚醒度の改善がミス防止対策に有用と考えられた。準夜勤務の回数、二交代夜勤の回数

においては有意な群間差が無かったことも勘案すると、生体の概日リズムを大きく変化させない勤務が望ましいかもしれない。時差への適応に個人差があることと同様に、概日リズム同調には個人差が大きい。集団を対象にした作業環境や勤務形態の工夫のみならず、個人の交代勤務への適応性を評価する方法の確立や個人の概日リズム特性や交代勤務への適応性に応じた勤務スケジュールの構築が必要とされる。

2．本橋らの研究により、総合病院に従事する看護師（大半は女性）の日中の過眠の実態が明らかになった。昨年の研究では対象者数が少なかったため、本年度では対象者を増やし、626人とした。ESSの平均得点は今井らの報告した産業労働者(女性)の6.18±3.88（373名）より高かった。看護師という対人接触が多く緊張の強いられる仕事の特性がESSの高得点と関与している可能性がある。交代制勤務に従事していることがESSの高得点と関連する可能性にちぃては、勤務状態別のESS得点の比較では日勤と交代制勤務者の間で有意差は認められなかったが、深夜勤務に伴う負担という項目では、非常に大きい（8.77±4.01）と回答した群では、大きい・小さい（7.70±3.54）と回答した群より得点が有意に高く、深夜勤務に従事することはESSの高得点と関連していることが示された。多重ロジスティック解析の結果、「落ち着かない」「ゆううつだ」「仕事中、強い眠気に襲われる」「以前とくらべて疲れやすい」といった要因がESSの高得点と関連していることが明らかにされた。これらはいずれも慢性蓄積疲労に関連した要因と考えられ、勤務に伴う慢性蓄積疲労状態が日中の眠気を誘発している可能性が考えられた。従って、総合病院に勤務する看護師の日中の眠気を予防するためには、慢性蓄積疲労を早期に発見し、これを予防することが最も効果的な方策であると考えられた。勤務中にミスしそうになる頻度については、本研究では頻度の高低とESS得点には関連性が認められなかった。ミスの頻度については主観申告であるので、今後客観的データに基づき、両者の関係をさらに検討する必要がある。

3．内山らの高校生を対象とした研究結果から高校生の生活、睡眠と昼間の眠気についての関連性が明らかにされてきた。平日の入床時刻は０：04で高学年ほど遅く、起床時刻は６：33で高学年・男子で遅く、睡眠時間は６時間20分で高学年・女子で短かった。自覚されている睡眠の問題では、入眠困難が10.8％で、睡眠維持困難が6.0％で、日中の過剰な眠気が43.3％で認められた。日中の過剰な眠気には早い平日起床時刻、遅い平日入床時刻、大きな平日と休日の起床時刻の差、短い入眠潜時、学校外で勉強しない、短い平日睡眠時間、悪い寝室環境が強く関連していた。大都市近郊の高校生においては平日の睡眠時間が短く、慢性的な睡眠不足状態にあり、日中の過剰な眠気を引き起こしていることがわかった。学校外で勉強をしないことが日中の過剰な眠気と関連していたことより、高校生の短い睡眠時間は受験勉強のためではなく、他の要因によることがわかった。

4．大井田らの本研究は日本人の一般国民を代表する対象者サンプルを用いて寝酒あるいは睡眠薬の使用について検討した。この

ようなテーマに関する全国規模の調査は、本研究および米国の報告を除くとほとんど行われていない。今後、寝酒や睡眠薬の使用に関する疫学研究が各国において実施され、国際比較が行われることを期待する。

本研究において、１週間に１回以上の寝酒は男性で有意に高いこと、年齢階級との関連性において加齢とともに漸増－漸減パターンとなること、そのピークは女性の方が若いことが示された。これらの３つの所見は、日本における一般的な飲酒習慣において認められているものであり[23]、寝酒に限定された特徴ではないようである。しかしながら、老年期になって寝酒を行うものの割合が漸減していく時期に一致して睡眠薬を使用するものの割合が増加することは、寝酒から睡眠薬に変更した人が多くいることが示唆されて興味深い。これは、寝酒と睡眠薬を併用している回答者が男性で1.5%、女性で0.8%と極めて少ない結果とも一致する。日本では睡眠薬は内科をはじめ様々な診療科において処方されている[24]。従って、老年期に身体疾患の診療で医療機関を受診する機会が増すことは、睡眠薬を入手する機会も同時に増えることとなり、結果としてこの時期の睡眠薬を使用するものの割合を増加させる一因になっているものと考えられる。

若年者群において、DZP10mg投与後に有意な精神運動機能の低下と自覚的眠気の増大が認められたが、DZP５mg投与後のこれらの変化は有意には至らなかった。高齢者群においては、DZP５mg投与後に有意な精神運動機能の低下が認められ、これは若年者群DZP10mg投与後とほぼ同等の変化であった。すなわち、高齢者では若年者と比較して半分の用量で同等の精神運動機能の低下を引き起こすことが明らかとなった。

E．結　　論

大都市近郊の高校生においては平日の睡眠時間が短く、慢性的な睡眠不足状態にあり、日中の過剰な眠気を引き起こしていることがわかった。学校外で勉強しないことが日中の過剰な眠気と関連していたことにより、高校生の短い睡眠時間は受験勉強のためではなく、他の要因によることがわかった。中学生についてそれぞれの睡眠問題に対して個別の関連要因が明らかとなった。これらの知見を今後の中学生の睡眠衛生に活かしていくことが重要と考える。また追跡調査にて睡眠問題とその関連要因の経時的変化を捉え、更に解析を深めていきたいと考える。交代勤務に従事する看護師を対象に、日中の過眠労働要因、生活要因との関連を調べたところ看護師で日勤労働者と比較して日中の過眠が高まっていることが示唆された。

今回の研究において主観的眠気、健康度を質問紙から評価するにとどまり、客観的な眠気や健康度に対して過小評価された可能性がある。これらの客観的評価とミスとの関連は今後の課題であった。また、対象集団では交代勤務者はほぼ病棟勤務者に対し、この交絡する２因子のいずれかがミスに寄与するかを分離して評価することが困難であった。今後は日勤のみの病棟勤務者のいる病院に対象を広げて調査する必要性がある。

睡眠時無呼吸症候群の重症度（AHI）と、ESSは有意な相関を認めなかった。このことから

ESSによる自覚的な眠気のみでは、睡眠時無呼吸の診断が困難であることがわかった。SAS患者健常者に比べ、不安ー緊張、抑うつ・落ち込み、怒り・敵意、疲労、混乱が大きく、QOLも有意に低下していた。SAS患者での日中の眠気がQOL低下に関与している可能性が示唆された。CPAP療法により多くの領域の気分状態とQOLが有意に改善した。主観的眠気は過小評価されやすく、精神運動機能低下との間に乖離が生じる危険性が示唆された。α-Attenuation Test (AAT) は客観的眠気強度を評価する際の指標として有用であることが明らかになった。

F. 健康危険情報

本年度中には研究実施中に問題はなかった。

G. 研究発表

1. 論文発表

Kamiya A, Kubo K, Tomoda T, Takaki M, Youn R, Ozeki Y, Sawamura N, Park U, Kudo C,. Okawa M, Ross CA, Hatten ME, Nakajima K, SawaA: A schizophrenia-associated mutation of DIC1 pertubs cerebral cortex development. Nature cell biology 20 November, 1-12, 2005.

Pallos H, Yamada N, Okawa M: Graduate student blues: The situation in Japan. Journal of College Student Psychotherapy 20(2), 5-15, 2005.

Fujii K, Maeda K, Hikida T, Mustafa AK, Balkissoon R, Xia J, Yamada T, Ozeki Y, Kawaha R, Okawa M, Huganir RL, Ujiike H, Snyder SH, Sawa A: Serine racemase binds to PICK1: potential relevance to schizophrenia. (In press)

Ueda M, Hirokane G, Morita S, Okawa M, Watanabe T, Akiyama K, Shimoda K: The impact of CYP2D6 genotypes on the plasma concentration of paroxetine in Japanese psychiatric patients. Progress in Neuro-Psychopharmacology & Biological Psychiatry (in press)

高橋結子、岩満優美、安居みや子、中村純子、井出敬昭、甲斐安曇、西井美恵、大川匡子：さまざまな技法による集団療法の臨床的特性とその意義について．精神科治療学 20(1), 67-74, 2005.

松尾雅博、尾関祐二、大川匡子：概日リズム睡眠障害および朝型・夜型の分子生物学．分子精神医学　5(1), 32-39, 2005.

向井淳子、大川匡子：フルトラゼパムからクアゼパムへの置換により昼間の抗不安薬の減薬も可能となった適応障害の症例．新薬と臨牀　54(3), 102-105, 2005.

村上純一、大川匡子：睡眠時の異常現象　レストレスレッグス症候群．臨牀と研究 82(5), 45-48, 2005.

小西瑞穂、大川匡子、橋本　宰：自己愛人格傾向尺度（NPI-35）の作成の試み．パーソナリティ研究　14(2), 214-226, 2006.

Kuriyama K, Uchiyama M, Suzuki H, Tagaya H, Ozaki A, Aritake S, Shibui K, Xin T, Lan L, Kamei Y, Takahashi K: Diurnal fluctuation of time perception under 30-h sustained wakefulness.: Neurosci Res. 2005 Oct; 53(2): 123-8.

Higuchi S, Motohashi Y, Liu Y, Maeda A. (2005) Effects of playing a computer game

using a bright display on presleep physiological variables, sleep latency, slow wave sleep and REM sleep. J Sleep Res. 14(3): 267-73.

Higuchi S, Motohashi Y, Maeda T, Ishibashi K. (2005) Relationship between individual difference in melatonin suppression by light and habitual bedtime. J Physiol Anthropol Appl Human Sci. 2005 Jul; 24(4): 419-23.

Yuasa T, Ishikawa T, Motohashi Y. Sleep rhythm and biosocial rhythm of daily living in the community-dwelling elderly persons. Akita J Public Health, 2, 39-45, 2005.

川島　佳、本橋　豊、和田正英、若松秀樹、金子善博、石川隆志、小松寛治. 川べりの散策が入院患者と老人保健施設入所者の睡眠リズムと抑うつ状態に与える影響について.秋田県公衆衛生学雑誌、2、51-55、2005.

内村直尚：生活習慣と睡眠. クリニカルプラクティス. 24：36-40. 2005

Mizuno K, Asano K, Inoue Y, Shirakawa S.: Consecutive monitorig of sleep disturbance for four nights at the top of Mt Fuji (3776m). Psychiatry and Clinical Neuroscience, 59(2); 223-225, 2005.04

Komada Y, Inoue Y, Mukai J, Shirakawa S, Takahashi K, Honda Y: Difference in the characteristics of subjective and objective sleepiness between narcolepsy and essential hypersomnia. Psychiatry and Clinical Neuroscience, 59(2); 223-225, 2005.04

Mizuno K, Inoue Y, Tanaka H, Komada Y, Saito H, Miahima K, and Shirakawa S.: Heart rate veriability under acutr simulated microgravity during daytime waking state and nocturnal sleep: Comparison of horizontal and 6° head-down bed rest. Neuroscience Letters, 383; 115-120, 2005.07.22

Nomura T, Inoue Y, Miyake M, Yasui K, Nakashima K: Prevalence and clinical characteristics of restless legs syndrome in Japanese patients with Parkinson's disease. Movement Disorders, 21(3); 380-384, 2005.10.06

Almeida FR, Lowe AA, Otsuka R, Fastlichit S, Farbood M, Tsuiki S.: Long-term sequellae of oral appliance therapy in obstructive sleep apnea patients. Part 2. Cephalometric analysis. Am J Orthod Dentfac Orthoped, 129: 205-213. 2006.

Almeida FR, Lowe AA, Sung JO, Tsuiki S, Otsuka R.: Long-term sequellae of oral appliance therapy in obstructive sleep apnea patients. Part 1. Cephalometric analysis. Am J Orthod Dentfac Orthoped, 129: 195-204. 2006.

Hashimoto K, Ono T, Honda EI, Maeda K, Shinagawa H, Tsuiki S, Hiyama S, Kurabayashi T, Ohyama K.: Effects of mandibular advancement on brain activation during inspiratory loading in healthy subjects: a functional magnetic resonance imaging study. J Appl Physiol, 100: 579-586. 2006.

Tsuiki S, Almeida FR, Lowe AA, Su J, Fleetham JA.: The interaction between upright mandibular position and supine airway size in obstructive sleep apnea patients. Am J Orthod Dentfac Orthoped, 128: 504-512. 2005.

Almeida FR, Lowe AA, Tsuiki S, Otsuka R, Wong M, Fastlichit S, Ryan CF.：Long-term compliance and side effects of oral appliances used for the treatment of snoring and obstructive sleep apnea syndrome. J Clin Sleep Med, 1(2)：143-152. 2005.

Mishima K, Tozawa T, Satoh K, Saitoh H, Mishima Y. The 3111T/C polymorphism of hClock is associated with evening preference and delayed sleep timing in a Japanese population sample. Am J Med Genet B Neuropsychiatr Genet. 2005; 133: 101-4.

Mishima Y, Hozumi S, Shimizu T, Hishikawa Y, Mishima K. Passive body heating ameliorates sleep disturbances in patients with vascular dementia without circadian phase-shifting. Am J Geriatr Psychiatry 2005; 13: 369-76.

Mizuno K, Inoue Y, Tanaka H, Komada Y, Saito H, Mishima K, Shirakawa S. Heart rate variability under acute simulated microgravity during daytime waking state and nocturnal sleep: Comparison of horizontal and 6 degrees head-down bed rest. Neurosci Lett 2005; 383: 115-20.

Nakamura W, Yamazaki S, Takasu NN, Mishima K, Block GD. Differential response of Period1 expression within the suprachiasmatic nucleus. J Neurosci 2005; 25: 5481-7.

Yin M, Miyazaki S, Itasaka Y, Shibata Y, Abe T, Miyoshi A, Ishikawa K, Togawa K: A preliminary study on application of portable monitoring for diagnosis of obstructive sleep apnea. Auris Nasus Larynx 32: 151-156, 2005.

Itasaka Y, Miyazaki S, Yin M, Shibata Y, Tanaka T, Ishikawa K: Effectiveness of surgical treatments for obstructive sleep-related breathing disorders: Upper airway pressure analysis. Sleep and Biological Rhythms 3: 114-121, 2005.

Yin M, Miyazaki S, Ishikawa K: Evaluation of type 3 portable monitoring in unattended home setting for suspected sleep apnea: Factors that may affect its accuracy. Otolaryngology-Head and Neck Surgery. 134: 204-209, 2006.

２．学会発表

Iwamitsu Y, Shimoda K, Abe H, Tani T, Okawa M, Miyaoka H, Buck R: The relationship among anxiety, emotional suppression, and psychological distress before and after breast cancer diagnosis. New Perspectives in Affective Science, Kyoto, Japan, 2005.

Okawa M: Overview of circadian rhythm sleep disorders. The 2006 Spring Congress of KASMED, Korea, 2006.

Okawa M: Present and future of sleep medicine in Asia. The 2006 Spring Congress of KASMED, Korea, 2006.

土井由利子、蓑輪眞澄、内山　真、大川匡子：短時間睡眠者と長時間睡眠者の主観的睡眠と精神的健康の特性について．第15回日本疫学学術総会、大津、2005.

大川匡子：不安や身体症状を伴う不眠とその治療．第５回ストレス医学研究会、岐阜、

2005.

山原真理、尾関祐二、大川匡子：電気痙攣療法により抗精神病薬に対するアレルギーが改善した統合失調症の一例．第97回近畿精神神経学会、大津、2005.

市村麻衣、田中和秀、栗本藤基、大川匡子、森信　繁、山脇成人：BPSDにrisperidone oral solutionが奏功した二痴呆症例－嚥下機能が低下している症例への対応－．第97回近畿精神神経学会、大津、2005.

田中和秀、市村麻衣、栗本藤基、森信　繁、山脇成人、大川匡子：精神科における窒息・救命救急について．第97回近畿精神神経学会、大津、2005.

村上純一、石田展弥、大川匡子：反社会的行動、感情不安定、慢性的な空虚感などの多彩な症状にオランザピンが著効を示した二例．第97回近畿精神神経学会、大津、2005.

吉村　篤、高橋　淳、青木建亮、増井　晃、大川匡子：クエチアピンが有効であった遅発緊張病の症例．第97回近畿精神神経学会、大津、2005.

大川匡子：日本人の睡眠．日本睡眠学会第30回定期学術集会、宇都宮、2005.

海老澤尚、内山　真、梶村尚史、三島和夫、井上雄一、亀井雄一、北島剛司、渋井佳代、中島　亨、尾関祐二、堀　達、渡辺　剛、加藤昌明、山田尚登、尾崎紀夫、大川匡子、豊嶋良一、高橋清久：概日リズム睡眠障害とPer２遺伝子多型．日本睡眠学会第30回定期学術集会、宇都宮、2005.

今井　眞、堀江直美、向井淳子、大川匡子：看護師の健康度、睡眠と事故．日本睡眠学会第30回定期学術集会、宇都宮、2005.

向井淳子、今井　眞、山田尚登、大川匡子：一般就労者における眠気と周辺特性．日本睡眠学会第30回定期学術集会、宇都宮、2005.

松尾雅博、尾関祐二、大川匡子：朝型・夜型傾向とhper２、PACAP遺伝子多型．日本睡眠学会第30回定期学術集会、宇都宮、2005.

小西瑞穂、岩満優美、尾関祐二、木村　新、村上純一、大川匡子：不登校を伴う睡眠相後退症候群患者の心理的特徴について－健常者との比較から－．日本睡眠学会第30回定期学術集会、宇都宮、2005.

村上純一、今井　眞、向井淳子、大川匡子：若年齢睡眠相後退症候群患者における終夜脳波解析．日本睡眠学会第30回定期学術集会、宇都宮、2005.

市村麻衣、田中和秀、栗本藤基、森信　繁、山脇成人、大川匡子：統合失調症における睡眠時無呼吸症候群．日本睡眠学会第30回定期学術集会、宇都宮、2005.

高橋正洋、山田尚登、青木治亮、大川匡子：睡眠と気分の関連性－一般住民による調査－．日本睡眠学会第30回定期学術集会、宇都宮、2005.

青木治亮、山田尚登、高橋正洋、大川匡子：双極性障害における気分と睡眠の関連性．日本睡眠学会第30回定期学術集会、宇都宮、2005.

向井淳子、増井　晃、山田尚登、大川匡子：摂食障害と睡眠障害．日本睡眠学会第30回定期学術集会、宇都宮、2005.

大川匡子：ランチョンセミナー７　日本睡眠学会第30回定期学術集会、宇都宮、2005.

渡邊　崇、上田幹人、佐伯吉規、廣兼元太、森田幸代、大川匡子、秋山一文、下田和孝：ポール・ヤンセン賞受賞演題〈気分障害・不安障害分野〉パニック障害患者の初期治

療反応とparoxetine血中濃度の関係．第15回日本臨床精神神経薬理学会－思いやりのある精神薬物療法－、東京、2005.

大川匡子、向井淳子、増井　晃、今井　眞、山田尚登：摂食障害の睡眠．第25回日本精神科診断学会、新潟、2005.

小西瑞穂、岩満優美、尾関祐二、木村　新、村上純一、大川匡子：不登校を伴う睡眠相後退症候群患者の心理特性－病態の解明・治療指針作成の一環として－．第25回日本精神科診断学会、新潟、2005.

吉村　篤、青木建亮、鳩谷　龍、大川匡子：塩酸clomipramineにより躁転した統合失調症の１症例－精神病後抑うつを中心とした診断的考察－.第25回日本精神科診断学会、新潟、2005.

大川匡子：睡眠障害の診断と治療導入（教育セミナー）．第25回日本精神科診断学会、新潟、2005.

海老澤尚、内山　真、梶村尚史、渋井佳代、三島和夫、井上雄一、亀井雄一、北島剛司、尾崎紀夫、中島　亨、尾関祐二、大川匡子、豊嶋良一、高橋清久：概日リズム睡眠障害とPer２遺伝子多型.第27回日本生物学的精神医学会、第35回日本神経精神薬理学会、大阪、2005.

向井淳子、増井　晃、今井　眞、大川匡子：摂食障害患者の夜間睡眠調査．第27回日本生物学的精神医学会、第35回日本神経精神薬理学会、大阪、2005.

尾関祐二、Lyuda Bord、澤村直哉、Ariel Lyons-Warren、Jeff Wheeler、藤井久彌子、大川匡子、澤　明：統合失調症感受性遺伝子DISC１の進化的特徴より統合失調症感受性遺伝子の特徴を検討する．第27回日本生物学的精神医学会、第35回日本神経精神薬理学会、大阪、2005.

松尾雅博、尾関祐二、大川匡子：朝型・夜型傾向とhper２，PACAP遺伝子多型．第27回日本生物学的精神医学会、第35回日本神経精神薬理学会、大阪、2005.

森田幸代、廣兼元太、増井　晃、大川匡子：摂食障害患者における選択的セロトニン再取込み阻害薬の効果とセロトニントランスポーター遺伝子多型の関係．第27回日本生物学的精神医学会、第35回日本神経精神薬理学会、大阪、2005.

大川匡子：モーニングセミナー４　睡眠障害とうつ．第27回日本生物学的精神医学会、第35回日本神経精神薬理学会、大阪、2005.

小西瑞穂、友野隆成、大川匡子、橋本　宰：自己愛人格傾向とあいまいさ耐性の関連が精神的健康に及ぼす影響．第14回日本パーソナリティ心理学会、盛岡、2005.

大川匡子：不安や身体症状を伴う不眠とその治療．第５回ストレス医学研究会、2005

大川匡子：プライマリケアのための新しい睡眠障害診療．Medical Tribune不眠症セミナー、大津、2005.

大川匡子（司会）：睡眠障害セミナー、大津、2005.

大川匡子：身体疾患に潜む睡眠障害．Medical Tribune不眠症セミナー、大津、2005.

大川匡子：女性のライフスタイルと睡眠．Osaka Psychiatric Medial Women's Meeting、大阪、2005.

大川匡子：神経疾患にみられる睡眠障害～診断と治療～．テレミーティング、2005.

大川匡子：第101回日本精神神経学会総会、大宮、2005.

大川匡子：概日リズム睡眠障害～最近の知見～．千里ライフサイエンスシンポジウム・セミナー「睡眠とリズム・遺伝子から行動まで」、大阪、2005.

大川匡子（座長）：働く世代の睡眠問題とその対応について．第２回ICOHランチョンセミナー、岡山、2005.

大川匡子：子どもの睡眠．第51回近畿医師会連合医研究協議会、大津、2005.

大川匡子：子どもの発育と睡眠障害．第4回こどもの心とからだを考える会、大阪、2006.

大川匡子：睡眠障害とは？～思春期の睡眠と不登校・ひきこもりについて～．精神保健福祉従事者研修会、大津、2006.

大川匡子：快適ライフのための睡眠．日本繊維機械学会講演会～睡眠・快眠にかかわる６つの視点～、大阪、2006.

大川匡子：生活習慣病（身体疾患）と不眠．Medical Tribuneプライマリ・ケアセミナー、前橋、2006.

大川匡子：現代の生活習慣と睡眠障害．栃木県心身医学会、栃木、2006.

大川匡子：子どもの睡眠．第３回兵庫県医師会学校医研修会、神戸、2006.

大川匡子：睡眠障害の診断と治療導入．第94回福井県神経科精神科医会、福井、2006.

大川匡子：快適な生活のための『睡眠学』．第21回生命情報科学シンポジウム、東京、2006.

三好美生、本橋　豊．シフトワーカーの眠気に関連する要因．第３回秋田県公衆衛生学会、秋田市、2006年10月．

三好美生、本橋　豊．生活リズム同調を重視した健康度評価に関する研究－女性における年齢と生活リズムの関連．第63回日本公衆衛生学会総会、松江、2005年10月．

三好美生、樋口重和、本橋　豊．アクチグラフを用いた地域健常

内村直尚他：高校生の睡眠と日常生活との関わり－高校生のためのグッドスリープイレブン（11カ条）の提言－．第30回日本睡眠学会．2005

Oka Y, Kioike S, Kogawa S.：Elderly patients receiving hemodialysis showed distuebed sleep architecture compared with healthy elderly control. Associated Profesional Sleep Societies, LLC 19th Annual Meeting. Denver, 2005.06.18.

Ebisawa T, Takano A, Uchiyama M, Kajimura N, Mishima K, Inoue Y, Azaki N, Okawa M, Takahashi K, Isojima Y.：Inverse association between S408n variation of human casein kinase1 epsilon gene and circadian rhythm sleep disorders. Associated Profesional Sleep Societies, LLC 19th Annual Meeting. Denver, 2005.06.18-06.23.

Inoue Y, Nomura T, Nakashima K.：Prevalence and clinical characteristics of restless legs synrdomes in Japanese patients with Parkinson's disease. Associated Profesional Sleep Societies, LLC 19th Annual Meeting. Denver, 2005.06.18-06.23.

Kaneko Y, Inoue Y, Fujiki N, Kondo H, Aizawa R, Iijima S, Kanbayashi T, Inaniwq C, Nishino S, Shimizu T.： The anticatapletic effect of milnacipran, a new serotonin noradrenaline reuptake inhibitor, on human and canine narcolepsy. Associated Profesional Sleep Societies, LLC 19th Annual Meeting. Denver, 2005.06.18-06.23.

Hayashida K, Chiba S, Yagi T, Ito H,

Yamadera W, Ozone M, Sato M, Nakayama K, Sasaki M, Inoue Y.: The psychological factors associated with subjective sleepiness in patients with obstructive sleep apnea-hypopnea syndrome. Associated Profesional Sleep Societies, LLC 19th Annual Meeting. Denver, 2005.06.18-06.23.

Inoue Y, Oka Y, Nomura T, Nakashima K.: Prevalence of Restless Legs Syndrome in Japanese general population. World Association of Sleep Medicine First Congress. Berlin, 2005.10.17.

Nomura T, Inoue Y, Nakashima K.: Clinical characteristic of restless legs syndrome in patients with Parkinson's disease World Association of Sleep Medicine First Congress. Berlin, 2005.10.18.

Koike S, Inoue Y, Kadotani H, Oka Y, Yamamoto K, Shibata M, Matsuda S, Miki R.: Prevalence and clinical significance of sleep-related breathing disorder in end stage renal disease. World Association of Sleep Medicine First Congress. Berlin, 2005.10.18.

Oka Y, Kadotani H, Nakayama Y, Minami I, Miyamoto M, Miyamoto T, Inoue Y.: Restless Legs Syndrome and periodic limb movements during sleep among Japanese industrial workers. World Association of Sleep Medicine First Congress. Berlin, 2005.10.18.

Handa S, Ogawa T, Tsuiki S, Yagi Y, Higashino R, Nakasone A, Harada K, Ohyama K.: The interaction between orthodontic/orthognathic and endocrinal treatment in a Kallmann's syndrome with cleft lip and palate. 10th International Congress on Cleft Palate and Related Craniofacial Anomalies, September 4-8, 2005, Durban, South Africa.

Isono S, Tsuiki S.: Tongue size and obstructive sleep apnea (OSA) patients with cranio-facial (CF) abnormalities. American Thoracic Society 2005 San Diego International Conference, May 20-25, 2005, San Diego.

Hashimoto K, Ono T, Honda E, Maeda K, Shinagawa H, Tsuiki S, Hiyama S, Kurabayashi T, Ohyama K.: Mandibular advancement during inspiratory loading deactivates respiratory-related brain regions. Oral appliance side effects in snoring/obstructive sleep apnea patients. 83rd International Association for Dental Research, March 9-12, 2005, Baltimore.

北村淳子，井上雄一：アンケートと簡易モニターを用いたSAS検診．第78回日本産業衛生学会，東京，2005.04.20-04.23

中島健二，野村哲志，安井建一，北山通郎，井上雄一，中曽一裕：パーキンソン病の臨床－進行期の諸問題－．第47回日本老年医学会学術集会，東京，2005.06.17.

岡　靖哲：腎不全透析患者におけるレストレスレッグス症候群．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01

井上雄一：睡眠生理とパニック障害．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

神林　崇，児玉　亨，井上雄一，有井潤子，近藤英明，宮腰尚久，武村尊生，兼子義彦，小川由理子，清水徹男：ナルコレプシーと

他の過眠症における髄液中のヒスタミン（第２報）．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

野村哲志，井上雄一，中島健二：パーキンソン病患者に合併したレストレスレッグス症候群と特発性レストレスレッグス症候群の臨床特性の比較．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

兼子義彦，井上雄一，藤木道弘，西野精治，近藤英明，武村尊生，相澤里香，金山浩信，神林　崇，清水徹男：ミルナシプランの情動脱力発作に対する効果．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

尾﨑章子，井上雄一，中島　亨，林田健一，本多　真，本多　裕，髙橋清久：過眠症患者の健康関連QOLの評価．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

對木　悟，井上雄一，本多　裕：企業検診における睡眠時無呼吸症候群スクリーニングの問題点について．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

駒田陽子，西田　泰，井上雄一：交通事故発現に睡眠の問題は関与しているのか？－10年間のつくば地区での交通事故調査結果から．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

南　一成，中山幸代，竹上未紗，森田智史，岡　靖哲，角　謙介，高橋憲一，中村敬哉，陳　和夫，谷口充孝，堀田佐知子，新井香奈子，若村智子，福原俊一，角谷　寛：睡眠の諸専門領域の参加による睡眠健康コホート研究(京都睡眠と健康のコホート研究)．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

駒田陽子，井上雄一，林田健一，中島　亨，向井淳子，髙橋清久：睡眠不足症候群の実態と臨床的特徴について．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

挾間玄以，井上雄一，植田俊幸：鳥取県における学生の睡眠相後退症候群の有病率調査．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

水野一枝，山城由華吏，田中秀樹，駒田陽子，水野　康，玉置應子，北堂真子，井上雄一，白川修一郎：入眠と心臓自律神経活動及び体温の時系列的関連についての検討．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

駒田陽子，水野　康，井上雄一，白川修一郎：脳波的入眠潜時と行動的入眠潜時の関係の時刻および動機による変化について．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，005.06.30-07.01

臼井靖博，高田佳史，浅野毅弘，椎名一紀，冨山博史，平山陽示，山科　章，井上雄一：閉塞型睡眠時無呼吸症候群を有する重度肥満者の血漿BNP値についての検討．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

宮本智之，宮本雅之，井上雄一，平田幸一：レム睡眠行動障害における123I－心筋MIBGの検討．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

海老澤尚，内山　真，梶村尚史，三島和男，井上雄一，亀井雄一，北島剛司，渋井佳代，中島　亨，尾関祐二，堀　達，渡辺　剛，加藤昌明，山田尚登，尾崎紀夫，大川匡子，豊嶋良一，髙橋清久：概日リズム障害とPer2遺伝子多型．日本睡眠学会第30回定期学術

集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

八木朝子，小曽根基裕，千葉伸太郎，井上雄一，伊藤　洋，清水徹男：睡眠パラメータcyclic alternating pattern（CPAP）を用いた睡眠の安定性の検討ー日本における不眠患者と健常人との比較ー．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

井上雄一，林田健一，松浦雅人，髙橋清久：睡眠薬長期投与の要因に関する検討．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

堀内育美，坂名　智，岩田安世，山本浩彰，佐原利明，山本勝徳，小池茂文，角谷　寛，岡　靖哲，井上雄一：透析患者のレストレスレッグ症候群（RLS）ー特に緩解例から学ぶー．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

森脇宏人，井上雄一，室田亜希子，千葉伸太郎，森山　寛：閉塞性睡眠呼吸障害患者におけるAcoustic Rhinomeryの応用．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

井上雄一，難波一義，岡　靖哲：閉塞性睡眠時呼吸障害に対する夜間部分断眠の影響．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

林田健一，井上雄一，樋上　茂，難波一義，秋山恵一，伊藤　洋，中山和彦：閉塞性睡眠時無呼吸症候群患者における呼吸関連指標の長期的経過に関する検討．日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005.06.30-07.01.

海老澤尚，内山　真，梶村尚史，渋井佳代，三島和夫，井上雄一，亀井雄一，北島剛司，尾崎紀夫，中島　亨，尾関祐二，大川匡子，豊嶋良一，髙橋清久：概日リズム睡眠障害とPer2遺伝子多型．第27回日本生物学的精神医学会／第35回日本神経精神薬理学会合同年会，大阪市，2005.07.07.

井上雄一，難波一義，林田健一，髙橋清久，本多　裕：閉塞性睡眠時呼吸障害と睡眠時パニック症候群の関係について．第27回日本生物学的精神医学会／第35回日本神経精神薬理学会　合同年会，大阪市，2005.07.07.

井上雄一，臼井靖博，林田健一，宮本智之：REM睡眠行動障害における心筋MIBG所見とpramipexoleの治療効果．第15回日本臨床精神神経薬理学会，東京，2005.10.11-10.13.

小曽根基根，八木朝子，伊藤　洋，田村義之，井上雄一，内村直尚，佐々木三男，清水徹男：睡眠パラメータCAPを用いたゾルピデムの精神生理性不眠症患者における睡眠の質に対する検討ープラセボを対照とした無作為化クロスオーバー比較試験での検討ー．第35回日本臨床神経生理学会学術大会，福岡市，2005.11.30-12.02.

八木朝子，小曽根基根，千葉伸太郎，伊藤　洋，井上雄一，佐々木三男，清水徹男：睡眠パラメータcyclic alternating pattern(CAP)を用いた睡眠の安定性の検討ー日本における不眠症患者と健常人との比較ー．第35回日本臨床神経生理学会学術大会，福岡市，2005.11.30-12.02.

林田建一，井上雄一，木村眞也，室田亜希子，笹井妙子，中山和彦：ナルコレプシーに合併する周期性四肢運動の臨床的意義．第35回日本臨床神経生理学会学術大会，福岡市，2005.11.30-12.02.

岡　靖哲，粉川　進，神林　崇，井上雄一，清水徹男：高齢慢性腎不全透析患者におけ

る睡眠パラメータの検討：一般高齢者との比較．第35回日本臨床神経生理学会学術大会，福岡市，2005.11.30-12.02.

白川修一郎，水野一枝，山城由華吏，田中秀樹，駒田陽子，水野　康，北堂真子，玉置應子，井上雄一：入眠と睡眠段階出現への心臓自律神経活動関与の時系列的検討．第35回日本臨床神経生理学会学術大会，福岡市，2005.11.30-12.02.

笹井妙子，井上雄一，難波一義，宮前ちひろ，室田亜希子，木村眞也：閉塞性睡眠時無呼吸症候群（OSAS）の夜間睡眠経過に伴う変化について．第35回日本臨床神経生理学会学術大会，福岡市，2005.11.30-12.02

對木　悟，井上雄一，岡　靖哲．閉塞性睡眠時無呼吸症候群患者に対する口腔内装置の治療効果予測．第１回関東睡眠懇話会，2006年２月４日，東京．

對木　悟，井上雄一，岡　靖哲．閉塞性睡眠時無呼吸症候群患者の食道内圧・気道閉塞部位と口腔内装置の治療効果．第21回不眠研究会，2005年12月３日，東京．

草薙宏明，佐藤浩徳，加藤倫紀，安部俊一郎，清水徹男，三島和夫，多様な内的脱同調を呈した非24時間睡眠・覚醒症候群の一例，第12回日本時間生物学会学術大会，つくば，2005年11月．

草薙宏明，佐藤浩徳，加藤倫紀，松本康宏，越前屋勝，清水徹男，ヒト末梢循環単核球における時計遺子転写リズム－若年健常成人－，第12回日本時間生物学会学術大会，つくば，2005年11月．

草薙宏明，佐藤浩徳，加藤倫紀，松本康宏，越前屋勝，清水徹男，ヒト末梢循環単核球における時計遺伝子転写リズム－加齢変化－，第12回日本時間生物学会学術大会，つくば，2005年11月．

安部俊一郎，三島和夫，佐藤浩徳，加藤倫紀，松本康宏，清水徹男，秋田大学医学部付属病院におけるせん妄治療の実態，第59回東北精神神経学会，盛岡，2005年９月．

佐藤浩徳，三島和夫，銀谷　翠，関根　篤，松渕浪子，清水徹男，イミプラミンが全身痛及び睡眠障害に対して用量依存的に効果的であった線維筋痛症の一例，第59回東北精神神経学会，盛岡，2005年９月．

加藤倫紀，越前屋勝，佐藤浩徳，草薙宏明，清水徹男，三島和夫，向精神薬服用時の自覚的及び客観的眠気の実態とその評価法，日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005年６月．

加藤倫紀，越前屋勝，佐藤浩徳，草薙宏明，清水徹男，三島和夫，高齢者はジアゼパム服用後、客観的な精神運動機能の低下に比較して主観的な眠気を低く評価する，日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005年６月．

佐藤浩徳，三島和夫，越前屋勝，草薙宏明，松本康宏，戸沢琢磨，清水徹男，高齢者では熱放散リズムに対して相対的に入床入眠が遅れている，日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005年６月．

三島由美子，穂積　慧，清水徹男，菱川泰夫，三島和夫，半身浴は生物時計の位相変位を伴わずに睡眠維持能を改善する－脳血管性痴呆患者を対象としたOPEN TRIAL－，日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005年６月．

草薙宏明，三島和夫，佐藤浩徳，松本康宏，戸澤琢磨，越前屋勝，佐々木道基，加藤倫

紀，清水徹男，ヒト末梢循環単核球における時計遺伝子転写リズム－10遺伝子での検討－，日本睡眠学会第30回定期学術集会，宇都宮，2005年６月.

三島和夫，市民公開講座：高齢者の睡眠問題について考える－その背景にあるもの・生活習慣からみた対策－，第45回日本呼吸器学会，千葉，2005年４月.

Matsumoto Y, Mishima K, Satoh K, Tozawa T, Mishima Y, Shimizu THishikawa Y, Chronobiological properties of cellular immune activities under sleep and sleep deprived conditions, 4th international congress of the World Federation of Sleep Research Societies, Dehli, India, September, 2005.

Mishima K, Fujiki N, Yoshino F, Yoshida Y, Sakurai TNishino S, Hypocretin receptor expressions in hypocretin neuron ablated (orexin/ataxin-3 transgenic) narcoleptic mice, 19th Anniversary Meeting of the Associated Professional Sleep Societies, Denver, USA, June, 2005.

Mishima Y, Hozumi S, Shimizu T, Hishikawa YMishima K, Passive body heating ameliorates sleep disturbances in patients with vascular dementia without circadian phase-shifting, 19th Anniversary Meeting of the Associated Professional Sleep Societies, Denver, USA, June, 2005.

Mishima Y, Hozumi S, Shimizu T, Hishikawa Y, Mishima K, Accelerating heat loss by passive body heating: effective, safety and convenient tool for deteriorated sleep maintenance in demented patients, 4th international congress of the World Federation of Sleep Research Societies, Dehli, India, September, 2005.

Nishino S, Shiba T, Mishima KFujiki N, REM sleep enhancing effect of thalidomide is dependent on the availability of TNFalpha, 19th Anniversary Meeting of the Associated Professional Sleep Societies, Denver, USA, June, 2005.

Nagura M, Iwsaki S, Mineta H, Miyazaki S：Palatopharyngeal surgery for OSA, pitfall and strategy The 3rd Sleep Respiration Forum in Taipei. Taipei. 2005.3.19

Saito H, Miyazaki S, Ogawa K, : Pulse-oxymetery is useful in determining the indications for an adenotonsillectomy in pediatric obstructive sleep apnea syndrome The 3rd Sleep Respiration Forum in Taipei. Taipei. 2005.3.19

Komada I, Miyazaki S: A new design for the palatopharyngoplasty in OSAS The 3rd Sleep Respiration Forum in Taipei. Taipei. 2005.3.19

Miyazaki S: Value of diagnostic assessment of the upper airways: XVII IFOS World Congress , Rome. 2005.6.25-30 (Round Table)

駒田一朗，宮崎総一郎：口蓋垂を温存した口蓋咽頭形成術の手術成績　第15回日本頭頚部外科学会．新潟市．2005.1.21-22

杉山　裕，宮崎総一郎，肥塚　泉：睡眠時無呼吸症候群スクリーニング簡易質問表の有用性．第34回睡眠呼吸障害研究会．東京．2005.2.19

日暮尚樹，菊池　哲，宮崎総一郎，田中俊彦，板坂芳明，石川和夫：閉塞性睡眠時無呼吸